愛と医者の召喚獣

天読

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛と医者の召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ４１３０Ｚ

【作者名】
天読

【あらすじ】
神の腕を持つと言われている医者の娘で、　世界最年少で医者になった『西川歩美』。　彼女は留学のために小学生の頃に離れ離れになった『彼』に会うために文月学園に入学した。
勉強ばかりだった留学時代分の青春、　そして３年間彼に会えなく溜まった欲求を満たすがごとく、　彼女の高校生活が幕を開ける。

プロローグ

学園長室、　そこで二人の人間が話し合っていた。

「あんた、　半年前に免許取ったんだろ？　だったら高校なんかに来てないで働いたらどうだい？」

目の前の白衣の女性に嫌味ったらしく言い放つ老婆、　この文月学園の最高権力者、　藤堂カヲル学園長。

「貴女みたいに老いた人間には理解出来ない理由があるんですよ」

妖艶な笑みを浮かべ、　嫌味を嫌味で返す白衣の女性。

「小学校卒業後、　アメリカに留学して最年少で医師になった“天才”の考えなんて私には分かるわけないさね」

「あら、　天才科学者の藤堂カヲルさんにそう言われるとは光栄ですね」

「・・・・・・・・あんたに言われても嫌味にしか聞こえないさね」

クスクス笑いながら言う女性に皮肉たっぷりに言い返す学園長。

「で、　なんでFクラスがいいんだい？　あんたはどう考えたって学園一の頭脳を持っているのに」

こんな無駄話をしていても、　ストレスが溜まるだけと判断した学園長は、　本題に切り替える。

「真面目に勉強したくないからですけど」

「・・・・・・あんたは何のためにこの学校に転入してきたんだい」

女性の返答に、　大きな溜息をつく学園長。

「それに、　Ａクラスには“彼”がいます」

「なんだい？　知り合いでもいるのかい？」

「か、　彼氏です」

「・・・・・・まさかそんな理由で入学してきたとはね」

頬に手をあて、　顔を真っ赤にして幸せそうな表情を浮かべる女性を見て、　学園長は再び大きな溜息をつく。

「で、　なんでその彼氏と同じクラスにしないんだい？」

「彼は頭がいいから、　絶対にＡクラスに在籍していると信じているんです。　それに彼は優しくて、　カッコ良くてーーーー」

「そんなことは聞いてないさね！！」

問いと全く関係ない惚気話をし始めた女性に大声で怒鳴る学園長。

そんな学園長の態度に少し不機嫌そうな表情を浮かべる女性。

「私がＡクラスに入ったら、　彼に所構わず甘えてしまって授業の邪魔をしてしまうからです。　だって、　彼は優しくて、　とても

カッコ良くーーーー」

「はいはい分かったよ！　Ｆクラスへの編入を認めるよ！！　制服は後日届けるからさっさと教室に行くさね！！」

女性が再び惚気話を始めようとしたので、　学園長は強引に話を終え早く部屋から出て行くように言う。

「はぁ、　トシ君。　早く会いたいよぉ」

そんな学園長の言葉も聞こえないくらいに、　妄想の世界に入り込んでしまっている女性。

「・・・・・・また手のかかるクソガキが増えたさね。　西村先生！　このクソガキをさっさと連れて行きな！！」

今日何度目かの溜息をつき、　部屋の扉に向かって一人の教師の名を呼ぶ。

「失礼します学園長。　編入生の西川歩美医師は・・・・・・・彼女ですか？」

学園長室に入ってきたスポーツマン然とした教師、　西村先生は妄想世界から帰ってこれていない歩美を見て、　困惑の表情を浮かべる。

「そうだよ。　これがあの西川泰造の娘さね」

「はあ、　天才は何かと変わった人物が多いと言いますが、　本当のようですね」

「天才と変人は紙一重ってことさね」

「・・・・・・・・」

学園長の発言に対して、　あんたが言えることか？　とでも言いたげな西村先生だったが、　特に何も言わず妄想世界にいる歩美を連れて学園長室を後にした。

第1問

「間に合ったー！」

FクラスとAクラスの試験召喚戦争が終わって4日後の朝、　明久はいつも通り遅刻ギリギリに教室に飛び込んだ。

「おはようアキ」

「おはようございます明久君」

「おはよう姫路さんと美波。　・・・・・・　ところで雄二達と何してるの？」

明久に笑顔で挨拶をする二人に、　教室の一番後ろのダンボールで集まっている理由を聞く明久。

「おはようじゃ明久。　何でも今日Fクラスに転校生が来るという噂があるのじゃ」

「転校生？」

「・・・・・・・・・・・・・・・　女子らしい」

「女子！？　それは本当なのムッツリーニ！？」

転校生が女子ということを聞いて、　目を輝かせる明久。

「留学先のアメリカから日本に帰ってきたらしいぜ」

「じゃあ英語とかペラペラなのかな？」

「多分そうだろうな。　こりゃ試召戦争の戦力になること間違いなしだぜ」

明久とは違う観点で目を輝かせる雄二。

『転校生の女の子。　ついに俺にフラグが立ったぜ！！」

『お前に立つのはいつでも失恋フラグだろ？　転校生ちゃんは俺がいただくぜ！！』

他のＦクラスの男子も、　胸に無駄な期待を抱いてバカ騒ぎしている。

「おい貴様ら静かにしろ」

そんなバカ騒ぎしている教室に、　Ｆクラスの担任である西村先生が疲れたような顔をして入ってきた。

「えー、　貴様らの様子を見る限りもう知っていると思うが、　今日はこのＦクラスに転校してきた生徒を紹介する」

西村先生が廊下側に向かって入れと言うと、　扉から白衣を着た女性、　西川歩美がゆっくりとした足取りで入ってきて、　黒板に自分の字を書く。

「アメリカから転校してきました西川歩美です。　よろしくね」

そして大人びた笑顔を浮かべながら自己紹介をする。

『『『・・・・・・・・・・・・』』』

その瞬間、　あれ程バカ騒ぎしていたクラスが静まり返る。　そして

『『『眼福じゃぁぁあああああ！！（ブシャァアアアッ！）』』』

鼻血をすごい勢いで噴出するバカ達。　Ｆクラスから歩美への歓迎のおもてなしは、　血の噴水という形になった。

オリキャラデータ（前書き）

物語が進むにつれて、　さらに更新していきます。

オリキャラデータ

西川歩美（にしかわあゆみ）

年齢　１６歳

性別　女

所属　Ｆクラス

小学校卒業後、アメリカに留学して最年少で医者になった天才少女。本人は脳外科医だが、　他の分野の知識も持っている。両親も医者をやっており、　父親は神の腕を持つと言われている。１６歳という若さで日本での手術を成功させたが、　世間ではその若さゆえに手術を行ったことについて賛否両論が飛び交った。　本人は自分以外でどれだけの人数があの手術を成功させられた？　と、　あくまで自分の行った行為を正当化している。文月学園に入学した理由は、　小学生のころに離れ離れになった彼に会うため。親の病院で働いているため、医者としての仕事は学校の二の次というわがままもきいている。

第2問

「あら？　みんなどうしたの？」

歩美は自分の笑みがFクラスの鼻血の噴水を作り出したということに気付いてなく、　首を傾げる。

「気にするな。　こいつらの頭がおかしいだけだ」

「へぇ、　頭がおかしいの・・・・・・」

雄二は自分の級友達に対して平気でバカにしている発言をし、　それを聞いた歩美は興味を示す。

「私、　脳外科医をやっているんだけど・・・・・・まだあまり入刀したことないから、　経験のために何人かいただけるかしら？　腕はそこいらの凡骨医者よりもずっといいから、　脳の異常も治せるかもしれないわよ？」

「脳外科医！？　その年でか！？」

「待つんじゃ雄二！　ツッコミ所はそこではないのでは！？」

自分が医者であり、　経験のためのモルモットを何人か寄越せと先程とは違うあくどい笑みを浮かべる歩美に対して、　雄二は級友のことよりも脳外科医であることについての驚きを示し、　そんな雄二に秀吉はツッコミをいれる。

「西川さん。　それって冗談よね？」

「冗談？　私が医者であることも入刀したいってことも全部本当よ」
「でも手術ってことは失敗したら死んじゃうんですよね？」
「そんなの当たり前じゃない。　特に脳の手術は少しでも失敗したら即死ぬわ。　でも私が手術を成功させたら急に鼻血を出すこともなくなるかもしれないわよ？　そこの赤髪の男の子の言う通り頭がおかしいから鼻血が出ているんだったらね。　まあ失敗しないと言い切れはしないわね。　私だって人間なんだから」
先程からずっと黙っていた美波と姫路も、　歩美の常識では考えられない発言につい口を挟むが、　歩美は平喘と常識はずれな受け答えをする。
「そんな無責任な・・・・・」
「その無責任さを無くす為に、　彼らに入刀させて欲しいんじゃない。
人の腕ではなく、　神の腕まで成長することができたら失敗することだってなくなるかもしれないわよ？　その為に彼らが犠牲になったとしても、　それは名誉なことよ」
歩美の発言に信じられないというような反応を見せる女子二人と秀吉だが、　歩美は罪悪感の欠片も感じていないように言い放つ。
「ま、　俺には関係ねぇし好きにしてくれや。　ちなみに一番鼻血をだしやすいのはそこのカメラを持った奴で、　一番バカなのは俺の二つ隣のマヌケ面した奴だ」

「あなたとても親切なのね。　ありがとう」

しかし雄二は自分には関係ないと言い張り、　さらには明久とムッツリーニを生贄に差し出し、　歩美は雄二に笑顔で礼を言う。

「だ、　だめです！　明久君の手術をしても無駄です！！」

「そうよ！　アキの頭はもう末期なんだから絶対に助からないわ！！」

「・・・・・・貴女達見た目によらず結構ひどいわね」

生贄に差し出された明久を救い出そうと反論の意見を出す姫路と美波だが、　明久をバカにした発言になっており、　歩美は苦笑いを浮かべる。

第2問（後書き）

歩美は「彼」以外に対しては結構冷たいこともあります。

第3問（前書き）

初感想を書いてくださった、まあさん。　ありがとうございます。
　感想を書いてくださった方には、　前書きで改めてお礼を言わせていただこうと思っております。　では、　第3問出題です。

第3問

「まあ、　その子は頭がおかしくても貴女達に愛されている様だから入刀はやめとくわ」

「え！　な、なんですかいきなり！？」

「そ、　そうよ！　なんで私達がアキのことなんかを好きになるのよ！！」

「はいはい。　ツンデレはみんなそう言うわ」

歩美は二人の様子から明久に好意を抱いていると推測し、　図星をつかれた二人は慌てて反論するが歩美はそれを軽くあしらう。

「その代わり、　このカメラの子は私がいただくわ」

「・・・・・・・・・・・・・・食われる！？（ブシャァアアアア）」

明久に興味がなくなった歩美は、　ムッツリーニを患者として連れて行こうとするが、　違う意味で受け取ったムッツリーニは大量の鼻血を噴出し

『『『異端者には死を！！』』』

復活したFクラスの生徒達も、　同じく違う意味で捉え、　出血多量のムッツリーニを抹殺しようと動くが

「私の患者に手を出さないで」

手術の邪魔をされたくない歩美は白衣のポケットから催涙スプレーを取り出し、　容赦なくFクラスの生徒達に発射する。

『ぎゃぁあああああ！！』

『目がぁぁあああああ！！』

『皮膚が焼けるーっ！』

FFF団のお馴染みの覆面を被ってない生徒達は、スプレーをまともに受け、　皮膚に火傷のような激しい痛みを感じて悶える。

「なんでそんな物が白衣から出てくるのじゃ？」

「護身用アイテム。　他には液状型やピストル型やその他色々。貴女も可愛いんだからナンパ対策にちゃんと携帯しないとダメよ？」

「ワシは男じゃ！！」

秀吉は何故ポケットに催涙スプレーなんかが入っているか聞くと、護身用ということで他にも色々な形状の催涙スプレーを取り出し、秀吉にもナンパ対策として薦めるが、　女扱いされた秀吉は声を荒げるが、

「男？　何を言ってるの貴女はどう見たって・・・・・・あ、　そういうこと。貴女性同一性障害ね。そういうことなら今はもうカメラの子には用はないわ。　ねえ、　私もしかしたら性同一性障害を治せるかもしれないのよ。そうしたら医療界初の快挙だわ。　ということで貴女私の患者ね。　大丈夫。　麻酔はここにあるから」

「違うのじゃ！　ワシは正真正銘の男じゃ！！　西村先生も何か言ってほしーーー」

「鉄人ならさっき職員室に戻ったぞ」

「な、　なんじゃと！？　ちょ、　ちょっと待つのじゃ西川！　やめっ・・・・・・！？」

「大丈夫。　痛いのは最初だけ。　後は何の抵抗も出来なくなるから安心して」

その発言は結果的に歩美の医者としての好奇心を刺激し、　手をワキワキさせながら秀吉を患者にしようと迫り、　そんな歩美に恐怖を感じた秀吉は西村先生に助けを求めるが、　雄二の衝撃的な告白により抵抗する手段がなくなった秀吉は腰に左手を回されそのまま抱き寄せられ、　歩美は右手の注射を突き刺そうとする。　が、

「歩美！　何をしているんだ君は！！」

「痛っ！？　誰よいきなり頭を叩いたの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

背後から急に頭を叩かれ邪魔をされた歩美は怒りで声を荒げるが、　後ろを振り返って自分を叩いた人間を見て、　驚愕で言葉を失った。

「全く。　アメリカに留学した3年間、　人間としては何も変わってないようだね」

「ト、　トシ君・・・・・・・・・！？」

その人間は小学生の頃に離れ離れになり、　歩美が文月学園に入学したただ一つの理由を作った「彼」。　文月学園２年生学年次席の「久保利光」だった。

第４問（前書き）

まあさん、　感想ありがとうございます。
では、　第４問出題です。

第４問

「久保君？　え、　久保君と西川さんって知り合いだったの！？」

「違うわ。　私とトシ君は夫婦『違う』　・・・・・・そういう冷めたところも好き」

いきなりＦクラスにやってきた久保と歩美が名前を呼び合っているところを見て明久は知り合いなのかと聞くと、　歩美は即否定して夫婦と言おうとするが久保に遮られ、　そんな態度も歩美は好きと顔を赤らめながら言った直後、

『『『Ａクラスの異端者が攻めてきたぞぉぉおおおおお！！』』』

「夫婦」　「好き」　というＮＧワードが二つも歩美の口から出たことにより、　Ｆクラスの生徒達は殺気を教室中に膨らませ、　久保の撃退を行おうとするが、

「うるさいわよハエども」

愛しの久保が狙われるのを見過ごすわけもなく、　歩美は今まで出していた色気を全て殺気に換え、　まるで害虫を駆除するように片手に一つずつ持ったピストル型催涙スプレーを的確に目に放つ。

『『『目がぁぁあああああああ！！』』』

「言っとくけど、　これは私の友人に改造してもらったやつだから効き目は長いわよ」

目が焼けるような痛みに床を転がる生徒達に、　歩美の無慈悲な言葉が降りかかる。

「・・・・・・・・・・・・・・危険なおなごが入ってきてしまったようじゃな」

「・・・・・・・・・・・・・・ああ、　こりゃ試召戦争に協力させるのも楽じゃなさそうだ」

その光景に、　雄二と先程被害を受けそうだった秀吉は大きなため息をつき

「久保君はいいなぁ。　西川さんみたいな美人の幼馴染がいて（何故か久保君と西川さんのことは妬ましく思わない。　むしろ応援したくなるよ。　どうしてだろう？）」

「そうでもないよ吉井君。　歩美はこの通り非常識極まりない人間だから振り回されるこっちは大変さ（吉井君がこんなに僕に親しげに話しかけてくれている！　僕はなんて幸せ者なんだろう）」

明久は自分が久保の抹殺をしようとしなかったことに疑問を持ち、久保は明久と話すことに幸せを感じている。

「おっと、　もう少しで授業が始まるから僕はこれで」

「うん。　じゃあね久保君（ところでＡクラスもＨＲ中に勝手に抜け出して良かったのかな？）」

「あ、　よ、　吉井君！　また歩美が暴走し出したら連絡してほしいんだが」

「分かった。　じゃあ僕のメアド送るね」

「よ、　よろしく頼むよ（吉井君とメールアドレスを交換。　夢じゃないのかこれは！）」

思わぬところで明久のメールアドレスを手に入れれた久保は、　内心狂喜乱舞で帰って行こうとする。

「トシく～ん！　私の頑張り褒めてよ～！！」

歩美は自分の働きを讃えてくれと訴えるが、　久保は聞こえてないようでスキップで帰って行ってしまう。

「スキップをしているトシ君も大好き・・・・・・吉井、　トシ君に色目使ったら殺す」

「・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「だ・か・ら！　今後トシ君に色目使ったら殺すからな」

「え、ええ！？いきなり何！？　僕は久保君に色目なんて使ってないし、　だいたい男同士で使うわけないよ！！」

そんな久保の後ろ姿に歩美はうっとりとした表情を浮かべるが、次の瞬間、　いきなり殺気を膨らませ明久に殺人予告をし、　明久はその理由に身に覚えがないと否定的な意見を出す。

「まあ、　そうしてくれるならあなたとは仲良くしたいわ。　トシ君の友達だしね」

「安心して。　僕は普通に女の子が好きだから」

明久の態度を見て、　歩美も明久への敵意を消して友好的な態度をとり、　明久は安堵の息を吐く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4130z/

愛と医者の召喚獣

2011年12月17日22時54分発行